

古屋家文書

「石垣原合戦日記」について

安部 和也

石垣原合戦の有様を記した旧記古文書は数多くあるが、ここに記する「石垣原合戦日記」は、合戦より五ヶ月後に記された興味ある史料である。

この史料は、南立石本村古屋作兵衛家の古屋勝馬氏所蔵している同家に伝わる古文書で、日記は表紙を含めて半紙四ツ切り十枚に記され、二十六節からなっている。

(古屋氏より原文コピーを戴いたので字句と配列は原文の俛に記し、各節ごとに解説を付け加えてみた)

(表紙)

慶長五庚子年九月

大友立石黒田実相寺山陣

石垣原合戦之次第覚事

(本文)

石垣原合戦日記

一、慶長五庚子年九月初旬大友

左兵衛頭吉統防州山口ヨリ

進発従大畑乗船九月九日豊

後国浜脇浦二着船同日夜

五ツ時立石江御入陣即本陣

立石邑古屋園二有合之毛ヲ

陣家トス

豊臣秀吉薨去の後、天下は石田三成派と徳川家康派の対立が激しくなり大友吉統を巻き込む結果となった。最初吉統は嫡子義乗が徳川秀忠に仕えていたので、徳川派東軍に加担する事と決めていた。しかし、石田派の西軍に味方せんことを策した西軍の将・毛利輝元は、当時、京都本能寺で時を過ごしていた吉統に「西軍の為に兵を挙げ豊後に入り豊後国を回復しないか」、とすすめ、次男正照を人質に捕り大阪城に閉じ込めた。動転した吉統は初志を翻し西軍につく事となり、毛利輝元が準備した軍船で、鉄砲隊百人(毛利兵)を従えて安芸大畑

久我四郎三郎

(広島県)を出発、慶長五年(一六〇〇)九月九日別府浜脇浦に到着した。(毛利兵は上陸することなく安芸に引揚げたと)

吉統は午後八時、立石村古屋園(南立石本村古屋勝馬氏宅一帯)を本陣とし、旧臣に檄を飛ばして挙兵を呼びかけたので、かなりの数の旧臣が義統の下に集結した。

一、吉弘嘉兵衛者同村坂本ト云ニ

陣ヲ居即有合之農家ヲ陣

家トス

大友一族(分家)の元屋山(豊後高田市)城主・吉弘嘉兵衛統幸は、主家改易の後、従兄弟の筑後柳川城主・立花宗茂のもとに身を寄せていた。統幸は吉統の嫡子・義乗が徳川秀忠に仕えているを聞き義乗を補佐せんものと、船で東行中、吉統が石田三成に組して豊後に帰り挙兵するを知り、周防上ノ関(山口県)で吉統に謁見した。

「天下の形勢、石田派西軍の絶対不利は動かしがたく、義乗君すでに徳川家に仕えているものを石田三成の

謀言に乗せられて、徳川に敵対すとは大いなる禍根を残すことになる」と、諫めたが吉統は頑として聞かなかった。此の場に至って、敗れんとする旧主を見捨てることは武士道に反するものと、吉統に殉ずることを決意、江戸行きを中止して国東の富来浦に上陸し、杵築をへて立石村の吉統の下に到着、本陣の下手坂本(観海寺御幸台)に右翼軍の陣を構えた。

吉弘統幸は大友能直の十二男泰広を祖とする田原氏の分家吉弘氏十代目に当たる。彼の祖父吉弘鑑理は宗麟の三老として大活躍し有名を馳せた人物である。父鎮信は宗麟の側近。大友家が落ち目になると叛者が続出する中で立花道雪と共に最後まで忠節を尽くした名将高橋鎮種は父鎮信の弟である。立花道雪に見込まれて立花家の養子となった立花宗茂は鎮種の長男統虎である。

一、宗形掃部者同村御堂ノ原ト

云ニ陣ヲ居是茂有合之農家ヲ

陣トス

宗像掃部は名を鎮統という。宗像家はもともと同紋衆

(大友家杏葉の紋の使用が許された、大友一族六十二家と、関東以来の家臣で豊後入国にお供した下り衆の家をいう)ではあったが有力者では無かった。天正七年(一五七九)大友一族の田原親賢、同じく田北紹鉄の大重臣が田原紹忍の台頭に対して反乱を起こした時、多くの同紋衆が紹忍に反発して出兵を渡ったので、鎮続が侍大将に起用され重臣に取り立てられた。

文禄二年(一五九三)大友軍六千の朝鮮出兵には出陣せず、鶴崎本營で大友家の嫡子・義乗を補佐して留守を守っていたが大友改易後、元家老・田原紹忍と共に、豊臣秀吉によって豊後竹田の城主・中川秀成に身柄を預けられていた。吉統の挙兵に応じて紹忍と共に馳せ参じ、紹忍は本陣で吉統を補佐し、鎮続は本陣の上手御堂ヶ原(堀田バス停南東の断崖上)に左翼の陣を構えた。

紹忍、鎮続は中川家より無断で持出した旗印を、大友本陣に押し立てた為、中川秀成が西軍に寝がえったと誤って家康に報告された。其れを正す為、中川秀成は佐賀の関の合戦で、多大の犠牲を払わなければ成らなかつた。

一、大友豊後二討入ヲ聞立石村

隣郷之者松井佐渡守ノ在城

杵築江人質ニ被召捕依之

大友方ヨリ柴田小六運野天助

兩人ニ数人ヲ添取返ニ向松

井方覚悟宜相原山ニ伏勢

ヲ置右兩人討死ス相残勢立

石江掃陣ス

但此勢之内ニ芦守健助ト云者有

此者ト平田川ヨリ同道し相原山之合

戦ヲ聞残念之事也

大友吉統が西軍に加担して豊後に帰国、挙兵するとの報を受けた東軍杵築城の松井佐渡守は、速見郡内の庄屋を人質に取り、杵築城内に閉じ込め、領民の大友軍への協力を絶つ作戦を行った。立石村に陣を敷いた吉統は、柴田小六、運野天助を杵築城に派遣し庄屋の解放と城明け渡しを、松井佐渡守に要求したが断わられたので、吉弘統幸(一節では宗像掃部)を大将に杵築城を攻撃し

た。城内の内通者によって大友軍は二の丸迄攻め落し本丸を攻撃中、松井軍救援の東軍中津城の黒田如水軍が、間近かに迫ったので攻撃を断念し、別府石垣原で黒田軍と決戦を行うため、直ちに攻撃隊は立石の本陣に向かって撤退を行った。その途中、相原山で松井方伏兵の攻撃を受け柴田小六と運野天助の両将は、敵弾に当たり討ち死した。

相原山の戦況は杵築城攻撃に参加した芦守健助より聞いた話である。

一、大友之勢都合九百余騎也

諸方二軍勢才足二およへとも

未夕来

大友軍の総勢約九〇〇人、大友関係者に援軍の要請を出したが援軍は間にあわなかった。大友一族の柳川城主立花宗茂は大友の救援に出陣したが、間にあわず途中で引き返したという。その後、宗茂は西軍として関ヶ原戦で奮戦し、敗戦により浪人となるが、その武勇と人柄は徳川家より高く評価され、大友一族では唯一人、再び柳

川城主となった。

他の史料には、石垣原合戦に参加した大友軍の総勢は、二〇〇〇人とも三〇〇〇人とも云われているが、大友家文書録にも吉統九〇〇人余りを率いて出陣したとあるので、此の数は正しいと思う。

一、九月十三日午刻黒田如水

鶴見村実相寺山江着す

其勢以上三千余騎也

当時、中津城主黒田長政は東軍として主力を率いて関ヶ原に出陣、中津城にいた父如水は大友吉統に翻意を促すため（文禄の役に共に戦った義統とは、共に東軍に加担するとの盟約が結ばれていた）傭兵を募り中津を出発した。国東半島を横断し、途中、高田城の竹中軍を加え総勢三千人以上で西軍の富来城、安岐城を攻略して、杵築を経て十三日正午、実相寺山に到着した。

東軍熊本城主加藤清正も、吉統一挙兵の報を受け直に出陣したが、九月十七日、現在の玖珠郡九重町引治で黒田軍の勝利を聞き引き返したと云う。

一、十三日未刻大友方ヨリ時枝久野

兩人討出ル黒田方ヨリ森太兵衛

小栗治右エ門小林都合七百余

討出双方火水ニ成相戦酉ノ刻

至双方相引大友方ニ名有侍

之首一ツ取之其日之軍者大

友方勝利也

十三日午後二時、大友軍より時枝・久野の両隊が出撃

とあるが、他の史料によると、最初は―吉弘統幸が兵三

百を率いて出撃し黒田軍を戦闘に誘ったとある。黒田軍

は森太兵衛隊（黒田節で有名な母里太兵衛）・小栗治右

衛門隊・小林隊七百余人で応戦し、四時間に及ぶ戦闘の

後、午後六時双方とも引き上げた。

此の戦闘は地形に精通した大友方の勝利で、黒田方の
名有る武将二名が討死した。

一、十三日夕松井佐渡守実相

寺山本陣二入加ル

大友軍の杵築城攻撃に城を守り抜いた松井佐渡守康之

と有吉立行は、兵二百人とも五百人とも云われてお

る）を率いて出陣し、実相寺山黒田軍の本陣に十三日夕

方に到着合流した。

一、式番掛十四日寅ノ刻大友方より

宗形掃部討出黒田方ヨリハ

久野次左エ門五十騎ニテ討出

上下不残討死ス宗形大二勝

利ヲ得ル

第二戦は十四日午前四時、宗像隊が出撃し、黒田軍は

久野隊五十人で応戦する。戦闘は久野隊全員戦死し宗像

隊の勝利となった。

一、三番掛大友方より宗形都甲

出陣黒田方ヨリ栗山大膳

森太兵エ松井佐渡守討

出双方大勢之合戦宗形兵

部討死ス

第三戦大友軍は宗像・都甲隊が出撃、黒田軍は栗山・森・松井隊が応戦。此の戦闘で大友方左翼軍の大將宗像掃部鎮統が戦死した。

一、四番掛大友方よりハ惣掛り

黒田方よりハ竹中伊豆守七百

余騎松井佐渡守五百余騎

其外千三百余騎都合貳千

五百余騎ニテ入違火水之

合戦ニ大友方二百余騎

黒田方三百七十余騎討死ス

第四戦、大友軍は全員で出撃し、此れを迎え撃つ黒田軍は竹中隊（豊後高田城主竹中重利）七百人余りと松井隊（杵築城の松井康之）五百人余り、その外千三百人余りの総員二千五百人余りで応戦。

此の戦闘で大友軍二百人以上、黒田軍三百七十人以上が戦死した。

一、五番掛大友方惣掛り黒



▲ 吉 弘 統 幸

田方ヨリ野村竹中討出双方
多分討死有

第五戦、大友軍は生き残った者全員で黒田軍に総攻撃をかける。黒田軍は野村、竹中隊が応戦し、此の戦闘は双方に多数の戦死者を出した。

一、六番掛黒田方物掛り二成

大友方小勢ニテ何分踏コ

タエス追々引退ヲ吉弘嘉

兵衛セイシ命ヲ助ラント思ハ

武士之道ニアラス戦場ニテ

討死スルハ後代之ホマレナリ

名ヲヲシム者ハ一寸モ引ヘカ

ラス進メ進メトハケマス故亦

ソロ軍立直り小勢ナレトモ

命ヲ先ニ立戦ふ故実相寺

山之キハ迄追詰ラル暫シ猶

豫有之ト見ヘル

第六戦、黒田軍は大友軍の壊滅作戦の総攻撃に出た、

大友軍は戦意を喪失して、我先にと逃げ惑うのを吉弘嘉

兵衛は「戦場で討ち死するは武士の本懐、後世まで其の

名が残る、名を惜しむものは踏み止まって戦え」と叱咤

激励した。大友軍は朝鮮の役で受けた「敵前逃亡をした

隠病者」の汚名を晴らすのはこの時とばかり、決死の反

撃で黒田軍を実相寺山黒田の本陣際まで追いつめる事が

出来た。

一、其時七番掛之軍ト成吉弘

嘉兵衛モ迎も此軍ニ勝利ナキ

トヲホエシヤ真先ニ進戦

事誠ニ鬼神之如クニ是迄

モ戦ニ一度モ外レシ事ナキニ

此度ハ自分壹人ニテ討出ん

故黒田方より吉弘之手に掛り

死ル者数ヲシラス仍而吉弘ニ

太刀ヲ合スモノ無之

第七戦は、再度の黒田軍の総攻撃で、吉弘嘉兵衛は

「もはや此れ迄」と覚悟を決め、独り敵陣に斬込み鬼神

の如く奮戦し、多くの黒田軍兵士を倒したので、終には

彼に立ち向かう者はいなくなった。

一、吉弘其日黒田方之首数都

合式十二其内八組者物頭之

首也

その日の戦いで吉弘嘉兵衛は、黒田方の将兵の首二十
二を取り其の内八つは有名な武将の首であった。

一、吉弘嘉兵衛石垣原之石二

腰ヲ掛見廻ス内黒田方

小栗次右衛門拵軍二成其辺

通り掛リシヲ招奇吉弘之日

我社大友之軍首吉弘嘉兵衛

ナリ此軍主人之運モ盡果

黒田ニ敗セラレ此上小勢ナレハ

立直スヘキ故モ無之我此所

ニテ切腹致ス間其方我首

ヲ取手柄ニスヘシト云終ト其

儘腹ヲ切小栗其首ヲ取

実相寺山本陣ニ出之小栗討死ス

吉弘嘉兵衛は石に腰掛け、しばしの休息を取っておる
とき、黒田方の武將小栗次右衛門が近くを通りかかった
のを呼び止め「我こそは大友吉統軍の大將吉弘嘉兵衛で
ある、此の戦いは黒田軍の勝利で主人吉統の命運は尽き

果てた、これ以上戦う気はない、自分は此所で切腹する
ので、貴殿は拙者の首を取って手柄にしたら良からう」と
云い終わると、すぐさま切腹して果てた。行年三八
歳。「土人其骸を石垣原に葬り、其塚今に存せり（吉弘
神社）」と旧記に記されている。

小栗次右衛門は吉弘嘉兵衛の首を黒田の本陣に届け、
再び出陣して戦死した。

吉弘嘉兵衛は他説によると井上九郎右衛門との一騎討
ちで死すと、又、井上の従士後藤太郎助の銃弾にあたり
死すとも云われている。

吉弘嘉兵衛が腰掛けた石は、昭和四十年頃まで西別府
病院西北の道路に沿うた原野に有って（現在の扇山二一
組の一〇）、腰掛け石又は腹切り石と呼ばれ、お花等のお
供物が上げられていたが、宅地開発工事者に依って他
に移されて今はない。（所在不明）

一、十五日大友吉統者黒田

方ニ被召捕同夜森太兵衛

御供ニテ豊前中津城工送

戦いに敗れた大友吉統は、自害するところを田原紹忍に止められ髪を剃り、十五日、黒田如水に降服して捕虜となった。如水は知己の間柄である吉統に武將森太兵衛を護衛に付けて同夜、中津城に送った。

その後、吉統は関東に護送され上総に幽居、最後は江戸牛込に幽閉中の慶長十年七月十九日（一六〇五）四八歳で病死したという。

吉統の死後、大友家は嫡子義乗と、その子長男、次男ともに早世したため、いったんは断絶した。のち正照の三男義孝が家督を継いで大友家を再興し、徳川幕府より高家として石高千石を与えられて家名を保つ事が出来たという。（大友氏の末裔は神奈川県に居られるとの事）

一、此迄之軍始終者大友方鎭

之達人多故□手柄多分有

之トイエトモ何ヲ云テモ小勢ニテ

合戦之掛引ニ損毛多クト

見受候

此の戦は大友方槍隊の勇敢な働きで黒田軍を苦戦に追

い込んだが、大友軍はなにしろ小人数のため、戦いを有利に進めることは出来なかった。

一、大友方ニテハ家老職田原

氏宗形氏吉弘氏此三人

之内田原氏高名少クシテ

討死ス其外ハ乍討死高名

多又曰杵主膳衛藤亦右工門

吉良傳右工門柴田小六運

野天助竹田津志摩大

神監物小田原又右工門都

甲兵部都合十二頭何連茂

討死也

大友方の戦死者の中には、田原紹忍親賢、宗像掃部鎮

続、吉弘嘉兵衛統幸の家老と、臼杵主善、衛藤亦右衛門、

吉良傳右衛門、柴田小六、運野天助、竹田津志摩、大神

監物、小田原又右衛門、都甲兵部の武將がいる。田原氏

以外は華々しく戦って戦死した。（此れには記されていない

が富士見通り永富氏の先祖で、大友方の武將永富與

右衛門尉も討ち死にしている。

史実では田原招忍は戦死しておらず、竹田城主中川秀成が西軍に味方したとの誤解を解くため、西軍臼杵城主太田一吉を攻撃した。十月三日の佐賀の関の合戦に、中川軍一番手で従軍して、早吸日女神社を焼き払っている。招忍が石垣原合戦から如何にして落ちのびたかは謎とされている。

招忍は田原氏本家・国東田原氏の分家武蔵田原氏の養子で彼の妹が宗麟の正妻（吉統の生母）であったため、宗麟の死後、吉統を後見した。彼は非常に保身の術に長じていた。天正六年（一五七八）キリスト王国建設のため第二次日向出兵で島津軍との開戦に多くの重臣が反対したのに、奈多八幡宮・宮司の二男に生まれた反キリストであるにもかかわらず、宗麟の機嫌を取って唯一人賛成した。日向遠征軍の総指揮官になった彼は、高城・耳川の戦いで大友軍が、全滅状態になったのに彼は行方をくぐらました。敗戦後、一月たってヤツト姿を現わし、敗戦はキリスト教のせいだと、自分への攻撃をかわしたほど、奸智に優れていた。

豊後大友家の滅亡は吉統の無能さと、招忍に反発する大友家臣団の分裂に起因するといわれている。

一、黒田方栗山太膳久野

治左エ門野村佐次右エ門井

上六右エ門曾我又右エ門小

栗治右エ門仲野玄哲此外

御與力竹中伊豆守松井佐

渡守都合十頭何連討死ス

黒田方の戦死者は栗山太膳、久野治左衛門、野村佐次右衛門、井上六右衛門、曾我又右衛門、小栗治右衛門、仲野玄哲以上の武將は黒田藩士である。其れ以外に援軍に駆けつけた竹中伊豆守、松井佐渡守の二将も戦死すると、あるが竹中伊豆守重利は慶長六年（一六〇一）府内城主になっており、松井佐渡守康之は慶長十七年（一六六二）木付城で七三歳の天寿を全うしている。

一、隣村之者杵築工人質二扶

出候者トモ十七日夕方帰ル

杵築城に人質として拉致らっしされていた速見郡内の庄屋は、戦いが終わったので十七日夕方解放されて、それぞれ帰宅した。

一、合戦之時分近く見物ハ不相

成平畑之裏山ヨリ見ル事故

委鋪著不分残念二候

合戦の様子は平畑（現在の一燈苑付近）の裏山から観戦する程度で戦いの模様、詳細には判らず残念である。

一、大友公実相寺ヨリ夜分

豊前エ御引越故御粧

不存

大友吉統は、十五日夜に中津城へ送られたので、その時の様子は判らない。

一、黒田本陣十六日ニ引払不残中津江帰城ス

石垣原の合戦に勝利した黒田軍は、十六日全員実相寺

山を出発して中津城に凱旋した。

一、右前断之名前等一向不分

宗形君之近習老人僧ト

成鶴見嶽法印之弟子

ニテ世ヲノカレ居タル人ニ委

鋪聞附留候

但俗名野原用助治重僧名

善学坊坊嶽寶泉坊弟子也

ここに書いた話は、当時、大友方の武将宗像掃部鎮続の近習野原用助治重より聞いた話である。その者は現在、鶴見嶽法印のもとで、仏門に入り僧となって亡き主君を弔っており、僧名は善学坊と云う。

一、此節拙者儀平畑ニ隠レ居候

故杵築エ不參相済軍之様子

見渡候得トモ万一杵築エ

參候様可相成と心得平畑

之奥より不出隠住仕居申候

平畑の裏山に隠れている内に戦いは終わったが、残党

狩りを逃れて出る事も出来ず、其の儘、隠れ住んでおり
お知らせがおそくなりました。(古屋家に伝わる口伝で
は著者久我氏は宗形掃部一族との事)

慶長六丑二月十五日認之

久我四郎三郎

小屋彦助殿

となつてゐる。

この史料を所蔵している古屋作兵衛は、江戸時代より
廃藩置県に至る迄古屋家統領は、家名の作兵衛を襲名し
て、立石天満天神社の祀官と立石村の庄屋職を世襲して
いた。このことは、古屋家の古文書で拜察出来るが、古
屋家のルーツを解明出来る史料は残念ながら残っていな
い。それは勝馬氏の先代の時、火災でほとんどが焼失
又は散逸してしまつたとの事、残つた史料と古屋家に伝
わる先祖よりの口伝とを会わせ考えると、次の仮説が想
像される。

古屋家先祖伝来の過去帖によると、現当主の勝馬氏は
三六代目に当たる。過去帖にあり且つ墓石が現存する二
三代目作兵衛惟常・若狭守傑山宗栄居士、元禄六酉五月
没を基準に考えると、古屋家の三六代前は一一〇〇年頃
となる。

古屋家と密接な関係がある立石天満天神社は、古屋家
古文書によると、文明四年(一四七二)、時の將軍足利
義政の命により、京都北野天満宮の分霊を、上野国義が
造営した現在地の神殿に、右京大夫勝元によって勧請さ
れたとある。北野天満宮が神社としての形態を整えたの
は天仁年間(一一〇八)頃で、寺号を慢殊院と称し、祀
官を松梅院、徳勝院、妙藏院の三家が世襲職として奉仕
したとの事である。古屋家の起りと北野天満宮の祀官の
起りが、同一時代なので或は古屋家の先祖は、北野天満
宮の祀官で文明四年に分霊を奉体して立石の地に入り、
以後、立石天満天神社の祀官を勤めたのではないだろう
か。

又、立石には古屋園、馬場、藏人という地名がある。
この地は平安朝時代、大宰府官道の要害の地として、豊

後ノ介の兵營が設けられており、地名は当時の名残と云われている。其の地名を氏姓とした古屋家の先祖は、或は中央から赴任してきた防人の高官であったのではないだろうか。

又また、勝馬氏の話では古屋家、古くは鶴見山お嶽神社をお守りしていた家系とか、お嶽神社は、鶴見山そのものを御神体とする自然神信仰の神社で、その信仰集団の中心人物が鶴見氏であったので、古屋家は或は鶴見氏に關係が有るのでは、とも考えられる。

なにはともあれ、古屋作兵衛家は、古くから由緒正しき名家として別府人の尊敬を集めており、建久七年（一

豊後明礬考(二)

天保の改革と明礬會所

入江 秀利

明礬會所の設立

脇 儀助は、享保二十年（一七三五）唐明礬の輸入を五万斤に制限し、市場に出回りはじた国内産の明礬と

一九六）大友能直の豊後入国の際に最初の本陣が設営された豊後大友家の幕開け地と、四〇〇年後、義統による大友家最後の幕締め地が、くしくも同じ古屋園と云う因縁の地を、本拠とした古屋作兵衛家の家系は、現当主六代目古屋勝馬氏によって守り続けられているのである。

以上

参考資料

大分の歴史 別府の歴史 大友物語

立石天満天神社由緒記 大日本百科事典

もに一手に買い受けて精製し直し販売する許しを得た。

そして、江戸や大坂の奉行に「脇売」を禁じる町触れと多額の冥加金を上納して、江戸・大坂の二か所に明礬會